



化企画は1988年にクリント・イーストウッドに持ち込まれたが、当時58歳だった彼は、「自分は若すぎるから、監督だけして、当時71歳だったロバート・ミッチェルで撮ろう。」と考えたらしい。しかし、その企画は流れてしまった上、以降も再三映画化の計画がたてられたものの、その都度うまくいかなかったらしい。しかして、最初の企画から33年後の2021年、やっとクリント・イーストウッド監督兼主演で本作が完成したわけだが、それは一体なぜ？

私が本作を鑑賞した2022年1月15日の新聞各種は海部俊樹元首相が91歳で死去したことを報じた。織田信長の時代は「人間50年」と言われていたが、近時の男の平均寿命は80歳を超えている。そんな時代状況ながら、91歳にして33年前の企画を実現してしまったクリント・イーストウッドのエネルギーにはまさに脱帽！しかし、『クライ・マッチョ』って一体なに？

それは映画を観てのお楽しみだが、今のクリント・イーストウッドに老カーボーイ役とドライバー役はまさに最適！今や彼には『運び屋』（17年）（『シネマ43』68頁）で見せた新境地のイメージが定着しているが、“監督デビュー50周年記念作品クリント・イーストウッドの集大成かつ新境地”ともいえる本作は・・・？

## ■□■老カウボーイが、なぜ13歳の少年と旅を？■□■

『運び屋』はストーリーが簡単だった。そのうえ、冒頭からすぐにテーマが提示され、以降すぐに主人公の87歳の運び屋としての一人旅が始まっていったから、すごくわかりやすかった。それと同じように本作も、冒頭にアメリカテキサスのロデオ界のスターだった、マイク・マイロ（クリント・イーストウッド）が、元雇い主、ハワード・ボルク（ドワイト・ヨーカム）からメキシコにいる、別れた妻リタ（フェルナンダ・ウレホラ）に引き取られている、今は13歳になっている息子ラフォ（エドゥアルド・ミネット）の連れ戻しを依頼されるシークエンスが提示される。今や孤独な一人暮らしを送っているマイクには、そんな犯罪ストレスの依頼を引き受ける必要はないが、ハワードに恩義がある彼は最終的にそれを引き受けることに。なるほど、なるほど。

しかし、ハワードは今頃になって、なぜ別れた妻の手からラフォを連れ戻したいと考えるようになったの？それについてハワードはマイクにそれらしい説明をしていたが、それって本当？そんな疑問もなしとしないが・・・。

## ■□■行きは良い良い、帰りは怖い。それは一体なぜ？■□■

トランプ大統領の就任以降、メキシコからアメリカへの国境越えが困難になったが、それとは正反対に、アメリカからメキシコへの国境越えは容易。本作を見ていると、それがよく分かるから面白い。しかし、本来マイクがハワードに請け負った、13歳の少年連れ戻しの任務は、ラフォと母親リタの同意さえあれば容易なはず。しかし、もしこの2人の同意がないと・・・？

本作のスリリングな論点はそこにあるが、ラフォはなぜ母親リタの家におらず、闘鶏用

のニワトリ“マッコ”と共にストリート暮らしをしているの？また、やけに色気満々で、はるか年上のマイクにまで色目を使うリタはマイクに何を求めているの？本作はそのあたりが分かりづらいのが難点だ。そのため、なにやかやと御託を並べながらも、結局テキサスでのカーボーイ生活に憧れたラフォはマイクと共にテキサスの父ハーワードの元へと行くことを同意したものの、母親のリタがマイクに対して、“追っ手”を差し出すというストーリーはイマイチ分かりにくい。そのため、本来単純なはずの物語なのに、マイクとラフォのメキシコからテキサスへの帰り道は、あれこれと不穏な様相を呈することに・・・。

### ■□■ 帰り道は思わぬ出会いから。想定外の物語が。 ■□■

『ロミオとジュリエット』（68年）も「愛と死をみつめて」（64年）も20歳前後の若者の恋愛物語だが、高齢化社会が急速に進む現代社会では、“老いらく”の恋（＝じいさん、ばあさん同士の恋）もあちこちで発生しているし、それに伴うトラブルも発生している。妻と死に別れたマイクがその後ずっと独身生活を送ってきたのは当然だが、メキシコ入りしたマイクには、色気ムンムンのリタからモーションをかけられてきたから、彼にはまだまだ男の色気があるのだろう。そんな思いで本作後半のマイクとラフォの帰路の旅をみると、新たに小さなまちでコンティナ（＝酒場兼食堂）を営みながら4人の孫を1人で育てている女性マルタ（ナタリア・トラヴェン）が登場し、全く想定外のストーリーが展開していくので、それに注目！

ちなみに、マイクはカウボーイとして、またロデオの名手として名を馳せた男だから、馬をはじめとする各種動物の生態に精通していたのは当然。そのため、マルタの居候状態になっているマイクは“獣医まがい”の活躍を見せるばかりか、馬の調教も兼ねてラフォに暴れ馬を乗りこなす術を教えていく中で、マイクとラフォには父と子、祖父と孫のような信頼関係が築かれてゆくことに。なるほど、これならいっそ、この地でラフォやマルタと共に永住を・・・？いやいや、ハーワードとの約束があるから、そうはいかないはずだ。しかして、マイクはいつまでこの地に留まるの？またリタの追っ手は、いつどういう形で登場してくるの？

### ■□■ “老いらくの恋”の行方は？ ■□■

『マディソン郡の橋』（95年）では、クリント・イーストウッドとメルル・ストリープという2人の名優が織り成す、中年同士の控えめな恋愛劇が面白かった。それと同じように、本作では意外にもマイクとマルタとの間でじいさん、ばあさん間の、これもごく控えめな恋愛劇が展開されるので、それに注目！もともと、マイクはハーワードとの約束通り、ラフォをメキシコ国境まで連れ戻るのが先。今はそれを妨害されているから、やむなくメキシコの辺鄙な町にとどまっているが、早くそれを振り払って、任務を達成する必要がある。

「マカロニ・ウェスタン」の数々の名作で、“最強のガンマン”を演じた俳優クリント・イーストウッドはとにかく強かったが、それは約50年前の話。本作の彼は今、老齡にム

チ打ってハワードとの約束を達成しようとしているが、追っ手との撃ち合いや格闘になれば、昔のようにはいかないだろう？そんな心配もあるが、さて、マイクとリタの追っ手との対決はいかに？

また、本格的西部劇『シェーン』（53年）では、勝負を終えた主人公が一人馬に乗って去っていく姿が「シェーン！」の呼び声と共に見事な絵になっていたが、さて、国境で無事にラフォをハワードに引き渡したマイクは、その後1人でどこに向かっていくの？なるほど、なるほど、老いらくの恋もいいものだ。“馬上のシェーン”でなく、“車上のマイク”が向かった先は、さて・・・？

2022（令和4）年1月25日記